信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教育学部 附属長野小学校

１年２組

大好きな　自然体験園
～出会いや発見を出発点にして～

大好きな　自然体験園で　たくさん　見つけたよ

４月入学してから小学校での生活にも慣れ、子どもたちは朝や2時間目休みに自然体験園で元気いっぱいに遊んでいます。自然体験園では、たくさんの出会いや発見があります。たくさんの出会いや発見から子どもたちは、「こんなことがしてみたい」「こんなことができそうだ」と子どもたちのもつ興味や関心を自ら沸き立てて次への活動へとつなげていきます。その姿から子どもたちのエネルギーを感じます。生き物や草花等と子どもたちの興味や関心は様々です。単に、遊んでいるだけではなく、遊びのなかにたくさんの学びがあります。ある日Aさんは自然体験園から帰ってくると、「先生、体験園に桑の実があったよ！」と嬉しそうに教えてくれたので、朝の会で早速、紹介しました。その日の1時間目は実際に桑の実を見に行くことにしました。桑の実の元へ集まり、「これが朝の会で、Aさんが紹介してくれた桑の実だね。」と話をすると、子どもたちの桑の実を見つめる目が輝いていきます。そして、子どもたちは枝を引っ張り始めると、「枝を抑えているから桑の実をとって」「こっちに来て、たくさん実がなっているよ」と子ども同士のかかわり合いが生まれていきました。数日後、Aさんは、「桑の実で何か料理したいな。」と話してくれました。そこで、クラスで桑の実ジャムづくりに挑戦してみることになりました。ジャムづくりでは、桑の実集め、下ごしらえ、砂糖に漬ける、煮詰めるという工程を保護者の方々にもご協力いただきながら自分たちでジャムづくりをする経験ができました。できたジャムを味わう表情は、充実感や満足感に溢れていました。

さらに先日、女の子たちが、「青虫を捕まえたよ！」と嬉しそうに見せてくれました。Bさんは青虫の成長が楽しみの1つとなりました。Bさんとの会話では、「今日は青虫さんどんな様子かな？」と青虫についての話題が増えていきました。数日が経ったある月曜日に朝教室へ行くと、飼育ケースの青虫が茶色い蛹になっていました。蛹になったことを子どもたちに朝の会で伝えると、「えーっ！」と驚いた様子でした。それから蛹の姿のまま何日も経ちました。じっくり見てみると蛹は時折もぞもぞと動くときがあります。蛹の中で蝶になって羽ばたく日を今か今かとゆっくり待ち、そして確実に大きくなってきている証だと思います。子どもたちも飼育ケースを覗き込んでは、「アゲハ蝶になるかなぁ。」と興味津々でした。そして、7月になってついに蛹が蝶に孵化しました。蛹がアゲハチョウになったことを朝の会で子どもたちに伝えると「見たい！見たい！」と目を輝かせていました。蝶を見つめる子どもたちのまなざしは真剣そのものです。じっと見つめていました。アゲハチョウですが狭い飼育ケースの中だと羽を痛めてしまうことが予想されます。そこで、クラスでアゲハチョウを「飼うか」「逃がすか」ということが話題になったので皆で話し合いました。当然、「飼いたい」「逃がしてあげたい」と

思いはそれぞれで、「大きいケースにしてはどうか」「広い外の方がアゲハチョウのためだと思う」とそれぞれの思いが語られます。子どもたちは、子どもたちなりに自分の思いを語っていました。最終的には、「捕まえた友だちの意見を大事にする」という考えになり、青虫を捕まえた女の子たちも悩んだ結果、今回は、「逃がす」という選択をすることになりました。いつも青虫のことを気にかけていたBさんに、「逃がすことになるけどいい？」と問いかけると、「寂しいけれど、それでいい」と語ってくれました。青虫を捕まえた女の子たちは、アゲハチョウのケースを囲みながら別れを惜しむように何かを語り合っています。そして、いよいよお別れの時です。子どもたちは、外へ駆け出し口々に、「バイバーイ」と力強く手を振っています。中には、「またねー」と言って大空に羽ばたいていくアゲハチョウの姿をいつまでも追っていく子もいました。そして、教室へ戻ってアゲハチョウとの別れについて振り返りをすると、Cさんは、「（アゲハチョウが）自然体験園に帰ってきてさ、また会えるかもね。」と語ってくれました。この言葉と別れ際の、「またね」という言葉が自分の中で結びついていくことを感じました。そして、別の場所や来年等に、これから先どこかできっとアゲハチョウを目にすることがあると思います。その時に子どもたちの目にはアゲハチョウがどう映っているでしょうか。きっと今までとは違った見え方をしているのではないでしょうか。子どもたちは、十分言語化できないかもしれませんが、心のどこかで今回の経験が蓄えられているはずです。最近では、自然体験園でアゲハチョウを見かけると、子どもたちは、「先生、アゲハチョウが戻ってきてくれたよ。」と嬉しそうに話してくれます。

やってみたいな　基地づくり

1年2組の子どもたちで「秘密基地」（仮称）を作ることになりました。きっかけは、2つの出来事でした。1つ目は、教室の外で基地づくりを始めた子たちの姿です。教室の外にたくさんの木や石等を集めて基地を作り始めた子たちがいました。その姿を見て、わたしは、「この子たちは自分たちなりに自分たちの居場所をつくろうとしているのではないか」と考えました。2つ目は、図工の時間に行った「ピタゴラスイッチづくり」での出来事です。算数で、「いろいろなかたち」の学習で使い終えた空き箱で、「ピタゴラスイッチを作ってみたい。」と考えた子どもたちですが、子どもたちの創造力は大きく膨らんでいき、最終的にはダンボールの基地が出来上がっていきました。基地の中での子どもたちの表情は、とても楽しそうです。そして、基地の中で子どもたちは、何やら楽しそうに話をしていて、時折、笑顔になります。基地にいると子どもたちは自然と仲良くなっていくような気がしました。互いの距離が自然と縮んでいくことを感じました。そこで、子どもたちが基地づくりや基地で過ごす時間を思いきり味わえる機会を設けてはどうかと考え、子どもたちに、「基地づくりをしてはどうか。」と投げかけてみると、「やりたい！」「面白そう！」と目を輝かせていました。自然体験園で実際に基地づくりをする場所へ行ってみると、たくさんの雑草が生えていました。たくさんの雑草を目の前にした子どもたちは、「先生、まず草取りが必要だよ！」と言って、草取りが始まりました。国語の学習で行った、「おおきなかぶ」になぞらえて、友だちと一緒になって、「うんとこしょ、どっこいしょ。」と言って、草取りを行っている子もいました。草取りで味わった、「（雑草が）なかなか抜けない」という経験をしたことで、「うんとこしょ、どっこいしょ。」という国語での音読にも変化が見られました。様々な活動が学習へとつながっていく瞬間でもありました。